

2021年8月15日 礼拝説教要旨

詩編講解説教73「心の清い人々は幸いである」

詩編73：1～12、マタイ14：28～33

第73編では、信仰者が抱く心の葛藤を読み取ることができます。詩人は「神はイスラエルに対して、心の清い人に対して、恵み深い」（1節）と言ったすぐあとで「それなのにわたしは、あやうく足を滑らせ、一步一步を踏み誤りそうになっていた」（2節）と言います。つまり信仰が揺らいでいるのです。どうしてでしょう。その理由は3節以下です。「神に逆らう者の安泰を見て、わたしは驕る者をうらやんだ。死ぬまで彼らは苦しみを知らず、からだも肥えている。だれにもある労苦すら彼らにはない。だれもがかかると病も彼らには触れない」（3～5節）神さまに逆らう者が安泰であるということです。彼らは苦しみを知らない、病気もしない。むしろ体は肥えていると言います。口語訳聖書では「すこやかでつやがあり」と訳します。その一方でこの詩人には病にあることがわかります。「日ごと、わたしは病に打たれ、朝ごとに懲らしめを受ける」（14節）そういう自分を見て惨めに思っています。

さらに神さまに逆らう者の描写が続きます。「傲慢は首飾りとなり、不法は衣となって彼らを包む。目は脂肪の中から見まわし、心には悪だくみが溢れる」（6～7節）彼らがいかに傲慢であるか、また悪意に満ちているかということが記されています。また「口を天に置き、舌は地を行く」（9節）というのは、まるで天から語るように言葉に力があるということでしょう。舌が地を行くというのは、その言葉が地に行き渡る、それほどに影響力があるということです。そして面白いのは10節です。「民がここに帰っても、水を見つけることはできないであろう」ここは括弧に入っていますが、写本の状態が悪く解読不可能ということです。新しい聖書協会共同訳は次のように訳します。「それゆえ、民はここに帰り、彼らの言葉を水のように貪る」つまり神さまに逆らう者たちの言葉を人々が水のように貪るのです。それだけ人々が神さまに逆らう者の言葉を喜んで聞くということでしょう。

そういう状況を見て、この人は正直に言うのです。「羨んだ」（3節）と。そのようにして信仰が揺らいでしまう。神さまを信じている者が苦しんで、神さまに逆らう者が「とこしえに安穩で、財をなしていく」（12節）。こんなことがあっていいのか。それなら神さまを信じている意味があるのか。こういう躓きというのは、誰もが経験することではないでしょうか。実際に、わたしたちも神さまを信じるゆえに悩み苦しむということがあります。教会に行くことで後ろめたい思いをすることもあるでしょう。信じていても試練はあります。神さまを信じてもいいことなんかない。それなら信じる価値があるのか。ただその論理で行くと、神さまの救い、恵みをこの世の良し悪しで、見える形ではかるということになります。良いことがあれば救われている。悪いことがあれば見放された。神さまの救いはそんな単純なものではありません。

今日は8月15日です。戦争を振り返る時に、当時、神さまを信じるゆえに苦しんだ人々がたくさんいたことを心に留めなくてははいけません。戦時中に国家による弾圧を受けた教会がありました。ホーリネスの教会です。熊本では熊本城東教会の森田豊熊牧師は捕らえられて獄に入れられ、懲役1年執行猶予5年の有罪判決を受けました。「天皇は神ではない」と信仰を貫いたゆえです。しかも日本基督教団はこのような信仰の戦いをした森田牧師を支持し擁護するのではなく、当時の文部省の内示を受けて彼らホーリネスの牧師たちの牧師職を剥奪し、教会を解散に追い込むという過ちを犯しました。ちなみに日本基督教団の統理は伊勢神宮を参拝した。

「天皇は神ではない」と戦う牧師たちがいる一方で、自ら神社を参拝した牧師たちもいたということです。

日本は戦争に負けましたが、いろいろな意味で当時教会も負けたのだと思います。神さまに逆らう者の安泰を見て、驕る者をうらやんだのです。そちらの方に平安があると思って、勝ち目があると思ってそちらになびいたのです。ただこういう批判は自分も同じ過ちを犯す者であるという自覚に立たないとできません。自分もその時代を生きていたら同じようにしたでしょう。詩人は言います。「あやうく足を滑らせ、一步一步を踏み誤りそうになっていた」（2節）わたしたちは踏み誤ってしまいました。

なぜ足を滑らせたのでしょうか。1節に答えがあります。「神はイスラエルに対して、心の清い人に対して、恵み深い」（1節）「心の清い人」というのは、まっすぐに神さまだけを見ているということです。そうであれば道を踏み外すことはなかった。でもそこから目をそらし周りに目がいってしまう。神さまに逆らう者が安泰にしている姿が目に入る。人と比較してそこに迷いが生じた。ただ心をまっすぐに神さまに向けていれば踏み外すことはなかったのです。とてもシンプルなことですが、心を清く、ただ神さまだけを見つめて生きるのは難しい。もちろん人間単独であればこれは不可能であると言わなければなりません。しかし神さまが足を滑らせるわたしたちを導いてくださるならどうでしょうか。「あなたがわたしの右の手を取ってくださるので、常にわたしは御もとにとどまることができる」（23節）とあります。ここに詩編第73編の救いが示されています。神さまが手を取って支えてくださるなら可能なのではないのでしょうか。

そしてこの救いを実現したのがイエス・キリストの救いです。福音書にある主イエスが湖の上を歩かれた話を思い起こします。マタイ福音書ではペトロが湖の上を歩いて主イエスのところに行こうする話を伝えます。「強い風に気がついて怖くなり沈みかけた」（マタイ14：30）ペトロは主イエスから目をそらしたので沈みそうになりました。けれどもその沈みかけたペトロの手を取って主は捕まえてくださいました。まさにキリストは沈みかけた、いや沈んでしまったわたしたちのところに来られ、手を取って捕まえてくださったのです。それが十字架とよみがえりの御業です。だからこそわたしたちは「御もとにとどまることができる」のです。

なぜ神さまを信じていても悪いことが起こるのか。苦しみが絶えないのか。神さまは「善人にも悪人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」（マタイ5：45）お方ですから、それは分かりません。けれどもたとえ悪いことがあっても、試練を受けても、神さまはわたしたちが信仰に踏みとどまることができるようにイエス・キリストを与えてくださいました。手を取って支えてくださいます。その事実は決して動きません。そして神さまは万事を益とされる救いをもって、わたしたちの人生を必ず完成に導いてくださいます。「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある」（マタイ5：12）信仰が必ず報われることを信じて歩みましょう。